

白髪一雄のフット・ペインティングと書について

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 橋本 紘明

白髪一雄(1924-2008)は足を使って描画するフット・ペインティングによって国内外を問わず高い評価を受けている戦後の日本美術界を代表する芸術家の一人である。これまで、白髪が所属していた前衛美術団体「具体美術協会」(以下「具体」とする)に関する研究の中で、白髪作品は様々な形で取り上げられてきた。例えば、近年出版された代表的な研究書として、ミン・ティアンボ『GUTAI——周縁からの挑戦』や尾崎信一郎『戦後日本の抽象美術——具体・前衛書・アンフォルメル』などが挙げられる。

また、白髪に関する個別研究も近年急速に進んできている。2022年に発表された亀田茂の「白髪一雄の絵画に見られる変容について 1954-1979」では、白髪がフット・ペインティングから離れた時期の作品について詳しく分析がなされている。これは、これまであまり重要視されてこなかった時期の白髪作品にまで光を当て、作品の変容の全貌を明らかにしようとする先駆的な論文であると言える。また、貝塚健も2016年に発表した「白髪一雄と仏教:《観音普陀落浄土》を中心に」で、白髪の1972年から80年頃までの制作について詳しく論じた。これは、白髪が晩年に仏教に傾倒したことに注目し、仏教との関係から作品を論じた数少ない研究として高く評価できる。このように、近年、白髪作品は具体との関係のみではなく、様々な角度から研究がなされてきた。筆者も2023年に提出した博士論文『「具体美術協会」における前衛書の受容と展開——墨人会との交流を中心に——』で白髪について書との関係からある程度論じた。そこでは、主に1940年から50年代の初期フット・ペインティング作品における書の影響や、2000年代の文字を使用した作品の一部について分析した。しかし、白髪の平面作品全体を見渡した研究はまだ十分に行われていないように思う。

そこで、本研究では白髪が書家との交流を経て、どのような影響を書から受けたのか、またその交流が終わりを迎えた後にも白髪がどのように、書的な要素をフット・ペインティングに使用していったのかという問題に迫る。

以下、令和5年度の「藝術文化研究」に投稿した論文をもとに研究の成果を記していく。論文の構成は4節で構成されており、それぞれの節で次のような問題に取り組んだ。第1節では白髪がインスピレーションを得た作品として、南天棒の書について述べた。次に、第2節では白髪一雄が書を再発見し、フット・ペインティングにどのように生かしていったのかを明らかにした。第3節では白髪が仏教に傾

倒していき、梵字をフット・ペインティングに応用していくプロセスを明らかにした。第4節では1980年代の白髪作品における自己模倣と、文字への注目を明らかにした。

これらの検証の結果、以下のような結論を導き出した。

1952年の南天棒の書に関する座談会に参加したことをきっかけに、白髪は墨人会の前衛書家たちと交流していくことになったと考えられる。さらに、白髪の周辺にいた具体作家の証言や、当時の白髪の制作を分析することによって、南天棒の書が白髪のフット・ペインティング誕生のきっかけになった可能性が非常に高いことが明らかになった。

また、「墨人会」の前衛的な筆法は、白髪が最初期に行っていた画面全体に塗り込むようなフット・ペインティングから初期に多くみられる動作の軌跡が線的に現れるフット・ペインティングに変容するプロセスに影響を与えたのだと考えられる。特に、墨人会の井上有一と白髪は、制作に対する態度に多くの共通点が見られた。また、彼らの作品の制作時期も近く、高い親和性が確認できた。

その後、1960年代から白髪は梵字への興味から仏教、密教へと傾倒していくこととなった。1970年代の作品の中には、梵字を使用し、曼荼羅を引用した作品も確認できるほど仏教への関心が強かった時期である。1970年代の白髪作品は身体性に重きを置いた制作から、精神世界を表現しようとする制作へと変化していったと考えられる。

白髪作品が再び大きく変容するのは1980年代に入ってからであった。この時期に白髪は原点回帰とも呼べるような作品群を発表する。これらの作品はいずれも1955年頃、つまり墨人会と草創期具体が最も親密に交流していた時期の作品を自ら参照し、オマージュのような形で制作していた。さらに、1990年頃に入ると白髪は文字を使用し始める。はじめは毛筆で書いた漢字のような形からはじまり、1997年には梵字を足で描いたと思われる新たな表現、〈フット・カリグラフィー〉とも呼べるような表現へと到達したのであった。その後、2000年には画面に文章の一部を書くなど、晩年の白髪は文字を積極的に使用するという姿勢が確認できた。

以上のように、白髪にとって書は生涯に亘り、インスピレーションの源であったということが明らかになった。そして、様々な書的な要素は長い期間をかけて白髪のフット・ペインティングに大きな影響を及ぼしていたことは間違いがないだろう。